# 異類交遊帖　続・萌葱譚
## ～ slow steps to anti-virus ～

人にとって隠り世はさほど遠い場所ではない。
闇の住人であるモンスターにとっても同じだ、陰陽の交わる人の町に触れることが出来る。
つまり、夏と晩秋の年に二度、この世とあの世を隔てた門は開く。
夏はともかく、秋のひと夜だけは行き来が可能になるのだ。

＋

＋

忘れ物はないかを何度も確認した。
王城からの手紙では、黄瀬を迎えに寄越すということ、待ち合わせは彼と黒子が初めて会った場所でいいとあった。日没後の町の通りなんて裏通りとはいえ大丈夫だろうか、黄瀬はちゃんと自分達を見付けられるだろうかとか黒子は不安と期待で胸をどきどきさせていた。
「こんなところでいいのか？　先生が馬車で来るんだろう？」
緑間が眼鏡を押し上げながら言う。首からぶら下がっている小さい薬瓶には悪魔が詰まっているという、おそろしいアイテムを持っている人の子なのだが、年齢は同じくらいだ。オアシス砦屋敷の黛によると何事も『図太い』らしい。ただ鈍感なので瘴気の類には気を付けてやれとは言われていた。
「…緑間君は〝森が呼吸する〟と聞いたことはありませんか？」
「む？　何だ、それは」
実はずっと考えているのだが、緑間も接したことがないようだ。いい機会だからと気を張って問うたが無駄だった、黒子は嘆息とともに力を抜く。
「先生は来ませんよ。力が強すぎるから多くは来られないって言ってたじゃないですか」
『先生』は王城のヴァンパイアのことだ、御年一千年を越える大妖である。そして、力の強い妖は人の町に自然災害的な影響を及ぼしてしまう。だから来るときは実体でなかったり、僕だったりした。先生は見た目穏やかな老紳士で、尖った雰囲気とか濁った

ような気配もなく、とてもモンスターとは思えなかった。王城にある学校の学頭だそうで、人の町についてもよく知っていて、黒子と緑間の親にも会っていた。

「そう言えばそうだったな」

緑間は黒子よりも気付かない。つまり、鈍い。

霧に取り囲まれた幻みたいな姿で、そうでないと人の町に迷惑が掛かってしまうから、と実体でないことを詫びてくれた。攻撃しようにも受け流されて出来ないし、なにより丁寧なその人は品があり、親たちをぽかんとさせた。緑間のうちは都だしかなり警戒されただろう、なのに彼も口ぶりからして先生を信じ、敬っている。

――――ギィ…

遠く軋音に似た何かが聞こえた気がした。緑間は壁のシミをじっと見詰めている。

「ぎ？」

音がした方を探そうとして視線を巡らせる。

早く、早くと子供達が黒子を追い抜かすように走っていた。冷たい風が背後から吹いていった。

ハロウィンでは黒子が住んでいる人の町もそうだけど、モンスタータウンもお祭り一色だ、町を飾り、広場では音楽会やコンテストなどが催される。彼らは人のようにモンスターに化ける必要はないから仮装パレードだとかはしない。けれども人が団体でやってきたりするからモンスタータウンの店先では茶菓を用意し、土産物を並べたりする。人の町からの研究調査のツアーは遊びに来る観光客そのものだった。

「……」

一歩を踏み出す。二歩、三歩と土の感触を踏みしめ、石畳に出た。

記憶にある風景だ、三角屋根がひしめくように立ち並ぶ石畳の道に、鼻歌を歌う標識、宙を舞う猫、苔生した墓標、色合いの濃い緑に揺れるカボチャのランタン、踊る蕪たち。

瞬き一つで風景が変わっていた。

「何なのだよ？　この騒ぎは…」

遅れて悠々と歩いてくる緑間が煩わしげに両耳を塞いだ。新しい眼鏡と重そうなトランクが二つ、いかにも都の良家の子息らしい格好と荷物（でもトランクの中身は多くがラッキーアイテムらしい）で、声だけの存在だった小瓶の中の悪魔というモンスターもそれらしい人影が背後にちゃんといる。

門が開くと同時に人の黒子はひと月以上前から準備したあれこれを持って駆け出していこうと思っていた。黄瀬を案内役に王城へ、遠足みたいな楽しさを抱え、赤司公子の元へまっしぐらに。

「イメージと違う…」

またしてもこんな来訪だ。どうでもいいことなのだけれど、一年ぶりの陰気だらけの空気を吸い込んだ。ああ暗い感じだなあ、とか人の町に比べるとやはり闇色の質が違うなあとか喩えようもない感情が胸に押し寄せてくる。

「黒子っち！」

「おー来たな」
保安隊の制服姿の黄瀬と、バスケットをぶら下げた火神が立っていた。
「さ。とりあえず遊ぶッスよー」
「……」
二十代と覚しい青年が横に立っており、緑間は思いっきり怪訝な眼差しを向けている。
「誰だ、お前」
腕を組み、てのひら一つ分ほど背の高い青年をじろりと睨め付ける。シャツにベストというありふれた町の青年といった姿の男は額の中央で別れた前髪を掻き上げるようにして笑うと
「オレだよ、真ちゃん」
あろうことか、緑間の頭をぐりぐりと撫で回した。
「あ」
声で分かる。そうじゃないかとは思ったが〝タカオ〟なる悪魔だ。緑間が召喚し、人の町では取り憑く媒体がなくて話すことしかできなかったのだ。これまでは薬瓶の中にいた悪魔は実体化すると話術が得意そうな青年になるのか、もっと商人じみたクセがあって食えない顔をしているかと思っていた。
「やー。助かったわー、真ちゃんに触ること出来て。でもそう身長変わらなくて腹立つわー」
「離せ」
人の町を抜け、何より狭い瓶の中から出てのびのび出来るとばかりにタカオは両手を挙げ、身体を伸ばす。見れば同族と分かる黄瀬と火神は二人で、へーとモンスターの中でも物好きなタイプと思われている悪魔タカオを見ていた。
「なんか黒子、背伸びた？」
「わかります？」
気付かれて嬉しい、王城で待っている赤司もきっと喜んでくれるだろう。黄瀬は肩に留まらせた小鳥に何かを囁くと暮れの空に放つ。報告だろう、黒子と緑間を見てぱんと手を叩く。
「さ、広場スよ」
「え？」
「メシは王城だけど、それまでは遊んで来いとよ」
「オレは研究で招かれたはずだが、遊ばせて良いのか？」
緑間は眼鏡を押し上げつつ言うが、実際のところは初めて見るモンスタータウンの様子に興味を引かれているようだった。行き交うモンスター達の姿は未知なる驚きに溢れており、それはほんの僅かのたじろぎと好奇心を駆り立てる。
「真ちゃんがここに慣れるにはいんじゃね？」
黄瀬が広場ではレースをしているのだと説明する。化け術を競うコンテストも行われているという。
「チーム戦で、結構いい景品とか出るぞ」
火神はやる気満々といった様子で拳を叩き合わせている。
「そ。今年のメインはランタンハウス」
広場は色とりどりの光に彩られ、押し寄せる歓声と震えるよう

な興奮に包まれていた。

＊

どうしたことだ、と赤司は思っている。

「……」

一年前は素直に抱き締められ、口移しの水もごく当たり前に飲み込んだのに。少しばかり背の伸びた人の子は抱き締めると照れたようにはにかみ、水ともなるともじもじと俯いて断った。強引に飲ませたら逆に怒ってしまったようだ、怒る理由が赤司には解らない。自分が口移しでやる水は甘いと気に入っていたのに。

「もう甘い水は要らないのだろうか…」

つまりはそれほど彼が成長したということで。

「何言ってんの？　赤ちん」

「いや」

喜ばしいことなのにちっとも喜べない。

「黒ちん、ちょい下がった方がいいよ～」

フローズン陽泉自慢の仕掛けはバニラアイスを盛った皿の上に氷の花火でも降るかのようだ、黄昏刻から始まった食事会は夜の帳が辺りを包み、光が一層輝かしい。黒子はスプーンを手に前のめりにドライフルーツとナッツ達が皿の上で弾けて踊るのを見詰めては火神に押さえられていた。紫原がやや得意げにスプーンをかちかちと鳴らす、珍しく頑張ったらしい。

「焦って食うなよ、誰も取ったりしねーし」

「でも」

「こっちはメレンゲでー、まー…、味は食えば分かると思うけどひと工夫してあるから。でもって、おかわりあるし、好きなだけいーよ」

人の子の来訪歓迎の食事会である。モンスタータウンのデリバリー弁当の後は、シンプルだが旨い菓子がサーブされる。黒子は幸せそうな顔でそれを頬張っていた。それだけで蟲虫が弾けてしまう。今日は人の子を二人招いているから食事会を催しているエリアは光の量を増やしている。人の周りは特に暖色のランタンを飛ばしていた。キラキラして幻想的な風景だと人の子は評していたが、瘴気や蟲虫にも受けているので注意しなければならない。

「…こいつに慣れない…」

実体姿の悪魔（タカオ）を侍らせた緑間少年は隣のテーブルで紅茶を啜っている。

「いい加減慣れようぜ、真ちゃん」

無自覚に悪魔を召喚し、無自覚に九六に留まった人の子はモンスター以上に鈍く、実渕は微妙な笑みを浮かべている。王城が取り組んでいるところの、九六対策の戦力どころか、新たなる謎を提示してしまったからだ。

「実渕さん、髪を切ってしまったのですね」

「オレもス」

人の子は知ってます、と頷いてみせると実渕さんの髪の毛は、

月の光に透かすときれいに見えるのだと言った。
「絹みたいに」
「あら」そう？
まんざらでもなさそうだ。
「だから長くして欲しいのか？」
人とは妙なものを好む。そしてそれは赤司をひんやりと凝らせたりする、人の子は慌てて手を振った。
「そういうわけではないです」
「ふーん」
紫原は全てのサーブを終えると自分達で作った菓子ではなく、黒子達が持ち込んだ人の町の駄菓子をさくさく食っていた。茶はメイドと氷室が注いでいる。
「テツヤ君、お代わりは？」
「いえ。ボクはまだ…」
「バニラシェイクは待ってもねえぞ」
「タイガ」
からかうように言って火神が窘められている。彼はモンスタータウンから初登城らしいが王城に踏み入っても物怖じもせず、妖力に圧倒された様子も見せなかった。
「黒ちん、これ旨いねー」
「…っく」
ことり、と何かが音を立てた。
「？」
テーブルを囲んだ全員が黒子を見る。
「しゃっくり？」
タカオが不思議そうに首を回す。黒子は口元を押さえ、困ったように小さくなる。黄瀬の疑うような目がこちらに向いた。
「赤司っち…」
「え？」
黒子はグラスの水を喉に流し込んでいた。何を飲んだところで、一度口から出たものは取り戻せない、…飲む？　もしや、あれを？　まさか。
「テツヤ」
すぐに思い至った。
「あ。は…ひっく」
黒子は肩を揺すってから応える。
「しゃっくり二回？」
タカオが強調するように言う、モンスター達はどよめき、彼も驚いているようだった。それから悪魔らしくおもむろに破顔する。
「えっと、…」
と、区切ると黒子はまだ熱そうな紅茶を飲み干し、ふーと息を吐いた。剥がれない視線に視線を巡らせ、目をぱちぱちさせる。自分自身のというより周囲の驚愕ぶりに困惑するといったようだった。
「はあ…。あの、珍しいですか？」
「…人は違うのかな？　モンスターがしゃっくりするのは特別な